

A close-up photograph of blackberry branches. The branches are covered in small, round berries that are in various stages of ripeness. Some are dark purple/black, some are reddish-orange, and some are green. The leaves are green and serrated. The background is a soft, out-of-focus green.

野いちご畑に
囲まれて

柚原早紀

西の魔女が死んだ

昔は

「絵のない本なんてつまらない」

と「不思議の国のアリス」の主人公アリスのようなことを思っていた。

そのため小学生の時読んでいた本には、すべて挿絵がついていた。文章ばかりでは疲れてしまう。

そんな私にとって、挿絵は気休めの役割をしていた。

それが少女時代ならまだしも、私の活字拒否は高校生になるまで続いた。小説なんて何が面白いの。それなら漫画を読んでたほうがずっといいと思っていた。

そんなある日、私の概念を破る作品が登場した。

梨木果歩さん著作の「西の魔女が死んだ」である。

その本に出会ったきっかけは本屋さんでも図書館でもなくて、高校の時受けた現代文の模試だった。

物語のほんの一部が問題として載っていたのだが、私は試験のことなど忘れてその小説を食い

入る

ように読んでしまった。

模試が終わるとすぐ、その本の続きが読みたくて書店へ走った。

主人公は中学校に入ったばかりの女の子、まい。

とあることがきっかけで学校に行きづらくなり、母方のおばあちゃんのもとで過ごすことになる。

突然やってきたまいをおばあちゃんは聖母のようにあたたかく迎え入れ、「なんでも自分で決める」

という魔女修行をすることに。

これは児童文学だそうだが、当然挿絵はない。

しかし物語の中のいろいろなシーンが映像となってくっきり浮かび上がった。これは挿絵つきの本

とはまた違った楽しみ方だった。1つの絵をみんなで共有するのではなく、それぞれが違うオリジナルなイメージを持って、想像力をふくらませる。

特に野いちごをつみに行ってジャム作りをするシーンは、私の大好きな場面だ。

この本の中には宝石のようなきらきらした表現があちらこちらに散らばっていて、とてもカラフルな印象を受ける。私の亡くなった祖母はいじわるばあさんだったので、厳しいが愛に満ちているおばあちゃんをとても羨ましく思ったものだ。

繊細な女の子、まいちゃんのように、どこかのグループに所属していないといけないという女子独特な付き合い方には、私も疑問を抱いていた。そもそも私は人づきあいが苦手で、どこのグループにも所属しておらず、1人でひっそりと過ごしてきた。休み時間などは孤独だったが、同時に1人でいたほうが楽に感じることも多かった。

だから

「自分が楽に生きられる場所を求めたからといって、後ろめたく思う必要はありませんよ」というおばあちゃん言葉はすごく心に響いた。

自分らしく生きればいいのかと自信が持てた。

今では多少の食わず嫌いはあるものの、いろんな本を読むことが楽しくなった。想像力をふくらませることによって、読書はより一層楽しくなる。

これは一種の魔女修行なのかもしれない。